

**世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書 (2024 年度採択案件)**

1. 業務の概要	
(1) 案件名	日本の小中学校、高校に在籍する外国にルーツをもつ児童生徒への日本語指導と心の居場所づくり
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人みらい
(3) 実施期間	2025年4月1日～2026年2月27日
(4) 実施国	日本
(5) 活動地域	愛知県知立市
(6) 活動概要	<p>①活動の背景：</p> <p>愛知県知立市は、人口約7万人の小さな市でありながら、県内でも外国人住民の割合が高いという特徴がある。市内には外国人住民が多く暮らす知立団地があることで知られているが、どの町にも外国人が居住しており、集住地区と散在地区の双方の特徴を併せ持っている。</p> <p>知立市は、自動車産業が盛んな豊田市、刈谷市、安城市と隣接しており、自動車関係の仕事に従事する外国人住民が多い。以前は、南米出身の外国人住民が多かったが、近年は東南アジア圏出身者が増え、多国籍化している。</p> <p>知立市には、日本語が分からない児童生徒に対して、初期の日本語指導や小中学校への適応指導を行う「早期適応教室」が設置されている。来日間もない等、日本語が分からない児童生徒は、約3ヶ月間通室し、日本の学校生活の流れや初期の日本語等を学んでいる。</p> <p>早期適応教室を修了すると、児童生徒は在籍学級に入り、日本の学校生活を本格的にスタートさせる。一般的に、日常会話の習得には1～2年、学習言語の習得には5年～7年かかると言われており、早期適応教室を修了しても、長期的な日本語の支援が必要である。</p> <p>市内の各小中学校では、日本語指導が学校の実態に合わせて行われている。しかし、順調に学校生活に慣れ、学び続ける児童生徒がいる一方で、教科学習の困難さ、気軽に相談できる相手や場所がないストレスなどから、登校しぶりなど精神的な不安定さにつながってしまうケースもみられる。</p> <p>当法人では外国につながる小中学生等を対象に、学校の宿題や教科学習等の学習支援を行ってきた。日本語での日常会話ができるが、学習言語の支援が必要な児童生徒が多く通っている。当法人においても、初期の日本語指導が必要な児童生徒への支援体制が構築できていないことを課題として抱えてきた。また、当法人の学習支援を通して進学を果たした高校生についても、継続した日本語学習の機会を得られていなかった。</p> <p>日本語指導には、日本語指導に関する専門的な知識や、子どもの教育に関わった経験がある講師が必要であるが、現在受けている市の補助金では講師の謝金を賄うことができない。この間にも、子ど</p>

もたちは悩み、年齢を重ねてしまうことにもどかしさを感じてきた。

日本語指導が必要な児童生徒が、基礎的な日本語が学習できる環境と、心の拠り所となる居場所づくりが急務であった。

②活動の目標

本団体では、

- ①児童生徒の日本語力を伸ばすことで、自信をつけ、先生や友人とコミュニケーションがとれるようになること、また将来の選択肢を増やし、自己決定できるような環境の基盤をつくること
- ②児童生徒が、悩みを相談したり、不安を吐露したりできるような心の拠り所となる居場所を地域につくること
- ③児童生徒を支援することで、保護者の不安を軽減し、孤立した子育てを防ぐこと
- ④学校と連携し、子どもをサポートする体制づくりを構築することを目的とし、事業を計画した。

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

A. 本事業目的①②の実現に向け、「みらいにほんご plus」を開室した。

【対象/参加人数】

対象を、日本の小中学校、高校に在籍する外国にルーツをもつ小学4年生～高校3年生で、初期の日本語指導を必要とする者とした。日本の高校進学を希望する過年齢の生徒も受け入れた。

入室した児童生徒数は以下のとおり。

小学生：計5名

中学生：計7名（過年齢1名含む）

高校生：計5名

【開催した日時】

●小中学生クラス（4～5月準備期間、6月開始）全33回

小学生 毎週火曜日 16時00分～17時00分 → 10月より17時30分までに変更。

中学生 毎週火曜日 16時00分～17時30分

ルーツのある国（ブラジル、ベトナム、フィリピン、ネパール、インドネシア）

●高校生クラス（4月受付、4月開始）全38回

毎週火曜日 17時30分～19時00分

ルーツのある国（ブラジル、ペルー、インドネシア）

【教材費】

小学生1カ月1,000円（10月から1,500円に変更）、中高生1カ月1,500円の教材費を徴収した。

教材費を徴収することは、子どもと保護者の継続的な参加への意識づけにもなると考える。

集めた教材費は、JICA基金対象外となる経費（講師の駐車料金等）や、教室の運営費に当てていく。

【内容】

●小中学生

- ・DLA (Dialogic Language Assessment for Culturally and Linguistically Diverse Students : 外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント) の中の「はじめの一步」「語彙チェック」、「話す・聞く」を実施した。子どもたちの日本語力を把握し、支援内容を検討した。
- ・日本語の文型学習、作文、読解練習、文字学習 (ひらがな・カタカナ、漢字)、会話練習に加え、家庭科、社会、理科の教科と統合させた日本語の支援を行った。
- ・カルタやなんでもバスケットなど様々なゲームを活動の中に取り入れ、子どもたちが打ち解け、居心地よく感じられる雰囲気づくりに努めた。

●高校生

- ・日本語能力試験合格を一つの目標にし、日本語の支援を行った。日本語能力試験の試験日から逆算して計画を立て、自分で学習するスキルを身に付けることを意識し、支援を行った。
- ・生徒同士がそれぞれの近況を報告し合う交流の場、居場所づくりに努めた。

B. 本事業の目的③を踏まえ、保護者とのつながりを深めるために、以下の取り組みを行った。

- ・子どもの学習の様子や家庭での様子を保護者に共有した。
- ・保護者・生徒との懇談会を行い、進路などについて情報提供や相談に応じた。
- ・保護者・生徒・中学校教員との4者懇談を行い、進路等の相談の場を設けた。

C. 本事業の目的④を踏まえ、小中学校との連携を図るために、以下の取り組みを行った。

- ・DLA (外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント) の結果を、文科省より年度途中で改定された「ことばの力のものさし」の評価に照らし合わせ、児童生徒の在籍校にフィードバックを行った。
- ・市内の小中学校に本教室への理解と協力をお願いした。
- ・中学校に本教室への理解と、保護者、生徒 (卒業生を含む) からの進路相談等の対応に協力いただいた。

* DLA (外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント)

文化的、言語的に様々な背景を持つ外国人児童生徒たちの日本語能力を、マンツーマンによる対話で測る支援付き評価ツール)

(2) 実施成果 :

「みらいにほんご plus」でみられた子どもたちの成長

子どもたちの日本語力を伸ばし、言語に関係なく本来持っている力を引き出せるよう、検討を重ねながら支援を行い、以下のような成果を上げることができた。

1. 日本語力と学習意欲の向上

子どもたちの日本語の力に合わせて、日本語会話、文型学習、文字学習を行い、一人ひとりが着実に日本語力を伸ばすことができた。

特に作文指導に力を入れ、五感を使ったスケッチ作文、日記、年賀状づくりにも取り組んだ。講師が丁寧に寄り添いながら言葉を引き出すことで、書くことへの抵抗が減り、「書いてみよ

う」とする姿勢が育った。最初と比べると書ける量が増え、漢字の読み書きも向上し、子ども同士で質問したり教え合ったりする姿も見られるようになった。

2. 教科と統合した日本語学習の成果

家庭科では、興味を引きやすいホットケーキ作りを題材に、味覚や調理に関する語彙を学び、調理手順書を書く活動を通して書くことへの抵抗を和らげた。

社会科では、世界の大陸から日本へと段階的に視野を絞りながら地理を学び、地図の方角や日本の地理など、学校の授業や定期試験につながる内容にも取り組んだ。講師が作成した説明文を読み、問題を解く活動では、学習内容の定着だけでなく読解力の向上にもつながった。こうした学習の積み重ねにより、「話をきく」「問題に挑戦する」「間違いを恐れずに答えてみる」といった前向きな学習姿勢が身に付いた。ある中学生からは「やったところが試験に出ました」という声が聞かれ、学習が自信につながった様子がみられた

理科では、天気や気温・雨量のグラフの読み取りなど、生活に結びつく内容を扱い、理解を深めることができた。

また、日本語がわからないという理由で学びの機会を逃すことがないように、「世界の美術作品」を取り上げ、有名作品を紹介するなど、興味を広げる工夫も行った。

3. 高校生クラスの成果と居場所づくり

高校生クラスには、中学生以降に来日し高校に進学した生徒が通室した。試験日を意識して自ら目標を立て、学習の計画を考えながら見通しをもって取り組むことができるようになった。

部活動やアルバイトの都合で退室した生徒もいたが、分からないところを高校の先生に聞きながら、自分で学習を続けるなどの計画を立てており、安心して送り出すことができた。

高校生クラスは近況を共有し合う居場所としての役割も果たし、進路や将来の目標について語り合う中で、互いに良い刺激を受け、切磋琢磨する姿が見られた。看護師を目指す生徒が大学進学を決めた際には、皆で喜びを分かち合うことができた。

こうした子どもたちの成長こそが、本事業の一番の成果だといえる。

保護者との関わりの中で生まれた成果

- ・ 送り迎えの際などの保護者との会話を通して、学習の様子や家庭での様子を共有し、保護者の不安に寄り添うことができた。
- ・ 保護者との2者、3者懇談や、中学校教員を含めた4者懇談を適宜行った。情報不足が子どもの進路決定に影響を及ぼさないよう丁寧に対応し、子どもの進路や将来をともに考えることができた。

学校との連携の中で生まれた成果

- ・ 本教室の周知や、必要な家庭との懇談会、進路相談、高校入試に関するサポートに中学校の協力を得ることができた。
- ・ 学区外の児童生徒も参加できるよう配慮をしてもらうことができた。
- ・ 中学校、高校からの働きかけによって本教室に通室することになったある生徒については、本教室に参加することで、地域社会とのつながりができ、孤立を防ぐことができた。

- ・DLA（外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント）の「はじめの一步」「語彙チェック」、「話す・聞く」の評価を小中学校と共有した。新しく改定された「ことばの力のものさし」にも照らし合わせ、子どものことばの力の現状を伝えることができ、多言語多文化の子どものことばの力を多角的かつ包括的に捉える視点を共有することができた。
- ・DLAのフィードバックを通して、ある小学校では、それまでのアセスメントを見直しDLAの「話す・聞く」が実施されるようになった。

（3）得られた教訓など：

「日本語が分からないから、できない子」ではなく、「支援があればできる子」という視点をもつ。

最初の作文では、どちらの言語でもいいよと伝えると、ある子どもは、母語で自分の考えをすらすら書いた。一方、日本語では全く書くことができず、書こうとする姿勢もみられなかった。児童に寄り添い丁寧に指導を続ける中で、ある日講師の支援を受けて、「学校の体育で高跳びをしました。90メートルも飛べました。とてもうれしかったです。」と、日本語で書くことができた。周りから「そうなの？すごいね。」と声をかけられて、満足気でもとてもうれしそうだった。その後、日本語で書こうとする姿勢がみられるようになり、ある日、日記を書かせた際には、体育でサッカーをしたときのことを、どんな練習をしたかまで詳しく書くことができた。

「日本語が分からないから、できないだろう」と決めつけず、「支援があればできる子」として、支援の仕方を考えていく視点を支援者側が持つことの大切さを実践を通して学んだ。この視点を持ち、実践成果を積み上げられたことは団体としても大きな成長となった。

地域社会とつながる場があることの大切さ、その場所をつくることの意義

- ・中学校を卒業し、高校を中退し、家にこもってしまっていたある生徒は、高校の先生の働きかけがあって本教室に入室した。この生徒は、高校進学を目指して再び学習をすることになった。その後卒業した中学校の先生方の協力を得て、高校入試に向けてのエントリーを一緒にしてもらうなどのサポートを受け、高校を受験することができた。
- ・不登校が続いていた生徒は、本教室に参加したことで、家庭外で学習に取り組む機会を持つことができた。学習内容を自宅で自主的に復習する様子を見られ、本教室への意欲の高まりがうかがえた。学校教員・保護者・本人を交えた4者懇談では、口数が少なく自分の気持ちを表現することが苦手な当該生徒が、卒業後の進路について自らの気持ちを保護者と教員に伝えることができた。それ以降、表情も明るくなり、前向きな変化が感じられた。

これらは、孤立を防ぎ、地域社会とのつながりを持つことができた事例となった。知立市が目指す「誰ひとり取り残さないまちづくり」には、こうした草の根レベルの取り組みが必要である。

（4）今後の活動・フォローアップの方針：

次年度も「世界の人びとのためのJICA基金活用事業」が採択されており、教室を継続していく予定である。

よりよい指導ができるよう指導内容を常に検討していくとともに、子どもたちの居場所づくりにもより力を入れたい。今年度はDLAの「はじめの一步」「語彙力チェック」「聞く・話す」を実施した。次年度は「読む」力の評価も進めていき、フィードバックを行いながら、学校との連携も深めていきたい。

今年度の活動の成果を行政にもアピールし、事業継続のため予算化を目指していきたい。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

子どもたちへの支援を通して、確かな手ごたえを感じた。仲間と学び合いながら自信をつけ、前向きに学習に取り組もうとする姿から、本教室が子どもたちにとって、地域で学ぶ大切な場となっていることを実感した。不登校や過年齢の生徒にとっては、地域とつながる受け皿としての役割も担っており、本教室がなければ支援につながらなかつたらと思うざるを得ず、地域だからこそできる居場所づくりの重要性を改めて感じた。

一方で、ほとんど教室に通えないまま、退室してしまった小中学生もおり、支援につなげられないもどかしさも残った。「わかるようになりたい」という気持ちがみられず、ゲームなど、他の関心が優先している子ども、家庭からの協力が得にくい子どもをどのように支援していくかという点については課題が残った。

また、小中学生と高校生クラスの時間帯が重ならず、交流の機会が十分に持てなかった。高校生は部活やアルバイトで早い時間に来ることができず、小中学生は、遅い時間になると安全面が課題となるが、良いロールモデルとして、交流ができる方法を検討していきたい。

(2) 活動の写真



(日本語学習の様子)



(カルタゲームをしている様子)



(スケッチ作文の様子)



(社会科の内容を学習する様子)



(視覚教材を活用し理解を促しました。)



(一人ひとり丁寧に寄り添って支援しました。)

(3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

地域での日本語支援がボランティアに委ねられることが多い現状の中、JICA 基金を活用したことで、学校や地域での日本語指導や子どもの教育に携わった経験のある講師がチームとなり、質の高い学習の場と心の居場所づくりを実現することができた。その結果、子どもたちの日本語力の向上や、学習に対する姿勢の変化など、様々な成果が生まれ、本教室が地域社会に果たす役割の大きさを強く示すことができた。

子どもたちの成長の背景には、講師間の綿密な打ち合わせと授業準備の積み重ねがあった。日本語教育の知識と子どもの教育の経験を積み重ねてきた講師だからこそ、一人ひとり丁寧な支援を実現することができた。こうした成果を継続・発展させるためにも予算確保の必要性を強く感じている。

JICA 基金活用事業を実施により、念願だった初期の日本語指導を地域で支えるという仕組みと実績をつくることができた。

JICA 基金活用事業で関わってくださった JICA 関係者の皆様、伴走支援者のご協力により、2024 年度の事業で成果を残すことができた。関わってくださった皆様に心より感謝申し上げます。